

第3章 印旛沼周辺の古代文化

印旛沼は、約3万年前の古印旛沼から出発し、一旦干上がった後、約1万年前頃から古鬼怒湾として再び水域となり、次第に浅くなって現在は陸化寸前のところまで遷移が進んでいます。人間は古印旛沼時代頃にはじめてこの地に現れ、激変する印旛沼とともに歴史を刻んできました。まず、有史以前から大和時代までの古い時代における人の営みからみることにしましょう。

1 有史以前

印旛地方における旧石器時代の遺跡は、2～3万年前の立川ローム層¹⁾(台地の表面を覆う関東ローム層という火山灰層のうちで最も新しい層)から発見²⁾されています。印旛地方に人の住みついたのは、古印旛沼の時代頃にあたります。

旧石器時代の遺跡²⁾は、谷津上流の小河川沿いの台地縁辺部に当たる「張出地形」のところに多く立地しています。人々にとって、近くに飲み水があり、見晴らしがよくて狩猟採取に便利で、比較的乾いた住みやすいところであったのでしょう。張出地形のところは、縄文時代の住居跡や近世の古城跡も多くみられ、人々が好んで住んでいたところです。旧石器時代は、古印旛沼の時代から水域の干上がった時代に当たり、現在の印旛沼との関係は見当たりません。

続いて温暖な縄文時代になると、古鬼怒湾という内湾が出現します。縄文時代の人々は、印旛沼を中心に河川交通によって周辺地域とかかわりを持って生活をしていた模様³⁾です。遺跡の密度は千葉県内でも高い地域ですが、当時の印旛沼は浅瀬が少なく、東京湾岸のような多量の食料資源を得る魅力は小さかったようです。縄文時代後期になると、印旛沼周辺の遺跡は増えていますが、流入河川を少し遡ると、東京湾から海産物を運んできた形跡が見られます。人々は、果実などの植物性食料の採取や、魚介類の他、イノシシ、ニホンシカなどの狩猟活動を行って食料を得ていた模様⁴⁾です。

印旛沼周辺には特殊遺物が数多く出土し、いくつかの集落が集まって共同生産 共同交易 共同祭祀などを行って地域特有の社会を形成していたことを彷彿とさせるものがあります。例えば、縄文時代後期の吉見台遺跡では、この集落だけでは考えられないような石棒 石剣などの石製品や「異形付土器」などの特殊遺物が発見され、「土器塚」を築くほどの大量の土器が出土⁵⁾しています。複数の集落が集まって行事を行っていたのかもしれません。

温暖な時期が過ぎて B.C.400 年頃に、稲作をもった弥生時代が始まります。この頃の遺跡は低地になく、台地上に分布しています。低地は、まだ人の住むには不安定なところであったようです。

弥生時代といえば、稲作によって富を得た一方で人同士の争いが激しくなり、集落を環濠で囲って外敵から守って生活をしていたというイメージがありますが、印旛地方では環濠のない集落もあり、戦いのあった証となる出土品は発見されていません。人々は、平穏に暮らしていたのでしょう。

当時の暮らし方の一例として臼井南遺跡を見ると、谷津の稲作をベースとして畑作などの農業を行っていたと思われます。当時の生業形態は谷津田の稲作に大部分を依存するのではなく、この地域特有の生活文化⁶⁾、多分縄文時代の形態を一部残した生活をしていたと思われます。

2 印旛沼周辺の四神社圏⁷⁾

古墳時代（4～7世紀頃）になると、千葉県北部地域の中核と思われる立派な遺跡が数多く見られるようになります。その一例は図 3-1のように、麻賀多神社（18 社）、埴生神社（3 社）、宗像神社（13 社）、鳥見神社（18 社）、の四つの神社が、印旛沼をとり巻くようにして互いに混じることなく独立した神社圏を作って分布していることです。小倉⁷⁾は、この四神社圏は、古代氏族の勢力圏を示すといっています。

このうち、麻賀多神社 18 社は、成田市台方に本社があり、それに程近い同市船形に奥宮があって、ここに大きな前方後円墳があります。麻賀多神社は、全国的にみてもここ以外に見当たりません。また、祭神は初代印旛^{くにのみやつこ} 国造^{いつこりのみこと} の伊都許利尊^{いづりみこと} に関係のある神々です。そんなことから、この神社圏は、印旛国造に任命されたこの地方の豪族の勢力圏と思われます。

埴生神社 3 社の分布する地域は、昔、埴生郡と言われていた地域にあたり、土を司る神の埴山姫命を祀り、ご神体は土師器^{はじのうつわ}です。この地域内から勾玉などを作る工房跡も出土しています。多分、この神社圏は、土器や埴輪・勾玉などを作る技術者集団の居住する地域だったろうと思われます。

宗像神社 13 社は、福岡県宗像市の宗像神社から勧請した神社とされ、いずれも印旛沼北岸の台地南側にあり、沼または沼に注ぐ小河川沿いに鎮座しています。宗像氏は、航海術にたけた氏族ですので、入り江のような当時の印旛沼の風景に魅せられて、ここに港を造って居を構えたような連想が生まれます。

鳥見神社 18 社は、印旛沼の北、利根川に近いところに分布し、本社・分社の区別はありません。いずれも古代の大和国城上郡の鳥見山にある鳥見大明神（現在の奈良県桜井市にある等弥神社）を勧請したとされ、祭神は物部氏の祖^{にぎはやひのみこと} 饒速日命^{にぎはやひのみこと} らであり、この地域は大和の大豪族物部氏の支配地と思われます。

このような神社圏の分布をみると、物部氏という大和の大豪族とモノ作りの技術者集団が、宗像一族の力を借りて印旛のこの地に来て西国の文化文明を伝え、地元の豪族と共に一大文化圏を築いたというシナリオが描けそうです。宗像氏の渡航技術を借りて豪族たちが移動することは、大陸から日本に人や稲作などの新技術が伝わるときや、九州・近畿を移動するときなどにもたびたび見られます。

小倉⁷⁾は、6 世紀の初めころに、物部の小事大連という人物が下総の国に匝瑳郡を建てることを認められた（続日本記）とあるので、物部の小事の子孫またはその一族が、匝瑳から太平洋を経て利根川をさかのぼって印旛沼に進出し、新居住地に祖神を祀る鳥見神社を建てたのであろう、と推察しています。

なお、銚子沖の海は黒潮と親潮のぶつかる場所です。当時の航海技術では、太平洋から利根川に船で入ることはかなり難しい、とする説があります。

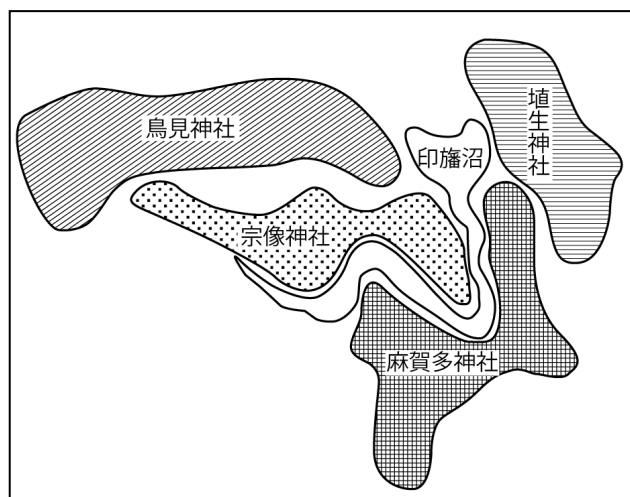


図 3-1 印旛沼周辺の神社分布図⁷⁾

3 龍角寺古墳群と龍角寺

もう一つ印旛沼周辺の古代文化を象徴する遺跡として、印旛沼東～北岸の台地に6世紀後半から7世紀にかけて造られた数々の大型古墳や遺跡があります⁸⁾。中でも龍角寺古墳群と龍角寺は注目されます。

龍角寺古墳群は、図3-2のように、大小120基を超す大規模な古墳群⁹⁾であり、地方の有力者が台頭して地域全体が繁栄していたことを物語っています。その中に、1辺約80mもある巨大な方墳 岩屋古墳があります。この古墳は、方墳として奈良 柊山古墳に次ぐ日本で2番目の大きさを誇るほどです。大和からみれば、こんな僻地に突如として大方墳の築造されたこと自体、大きな謎とされています。

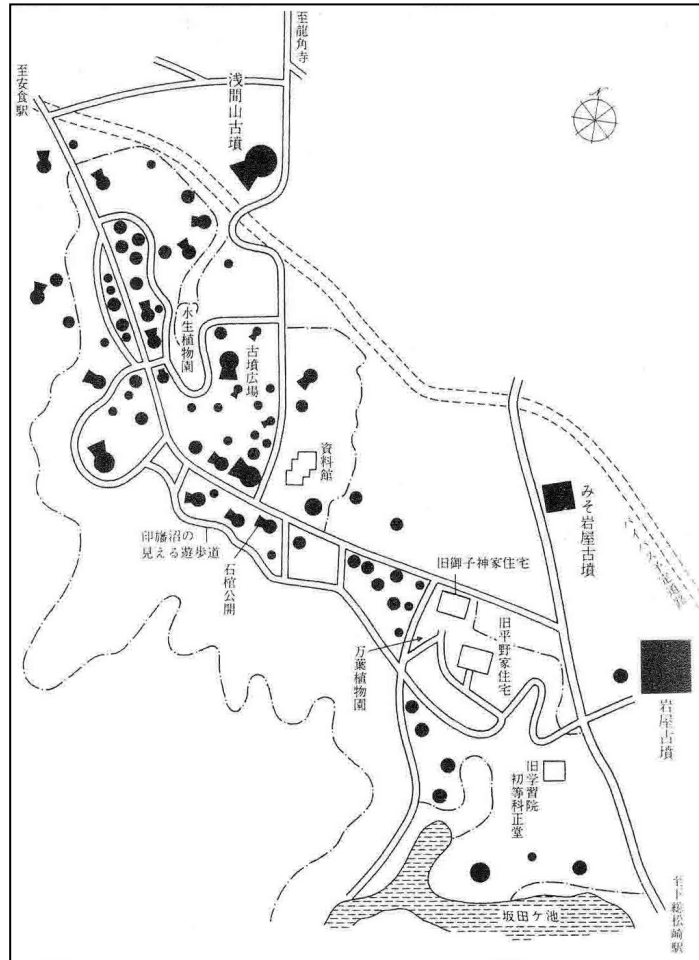


図 3-2 龍角寺古墳群⁵⁾

岩屋古墳の築造は古墳時代末期の7世紀後半と推定され、その近くにほぼ同時代に建立された龍角寺があります。龍角寺と龍角寺古墳群は白鳳道と呼ばれる直線の道で結ばれています。

龍角寺は、和銅2(709)年、龍女が現れて金像薬師を奉じて建立された寺⁹⁾と伝えられ、関東で最も古い白鳳期(7世紀後半)の薬師如来像(国宝)が、仮堂に安置されています。龍角寺は、仏教が日本に伝来した初期の様式をもって建立された著名な寺院であり、当時の大きな仁王門や、講堂跡・三重塔の礎石が残されています。当時のこの地域における精神的物質的文化の高さを物語っています。

その頃、日本の政治の中心であった大和では、古墳築造の役割を仏教寺院の建立に移行させていました。印旛沼周辺にあっても、大和の新しい動向にいち早く対応して、岩屋古墳の造営から龍角寺建立へと切り換えたのでしょう⁵⁾。きっと、大和と直接結ばれた有力な豪族がいて、大和の最新の文化文明を直にこの地に伝えていたことと思われます。

ちなみに、白鳳佛は関東では東京都武蔵野市の深大寺とここ龍角寺にしかありません。また印旛沼東岸台地上には八代玉造遺跡⁵⁾があり、当時、勾玉(マガタマ)などを盛んに作っていました。この一帯は、関東でも屈指の文化圏が広がっていたようです。この文化圏を、仮に印旛沼古代文化圏としておきましょう。



写真 3-1 龍角寺

隆盛を誇った当時の姿を忍びながら龍角寺を訪ねてみると、白鳳佛を安置した小さなお堂がポツンと立っているだけで、荒涼とした光景が広がっていました。度重なる火災によって伽藍のすべてを焼失し、大きな礎石と立派な経塚が当時の繁栄ぶりを偲ばせているばかりです。なお、龍角寺の繁栄を忍ばせる門前町特有の旅館風の建物が、昭和末期まで残っていました。

龍角寺には、印旛沼の龍が雨を降らせて、干ばつに苦しむ農民を救ったという有名な竜伝説（[参考 2]）があります。龍伝説は、法華經信仰の流布のために伝えられた慈悲の世界の象徴¹⁰⁾とされていますが、現代ではこれをアレンジして環境保全を取り込んで、現代風ミュージカル¹²⁾に仕立てて地域おこしをしています。

〔参考 2〕印旛沼の龍伝説

龍角寺には、有名な龍伝説があり、江戸時代の著書「利根川図志」⁹⁾に、こう書かれています。天平 3（731）年、天下は干ばつに見舞われ、龍閣寺では、朝廷の勅を奉じて釈命上人が雨祈りを行っていました。すると、上人の法澤に深く浴して、身長 8 尺（2.4m）ほどの小さな龍が現れ、「私は南池に居る小龍です。なんで自分の体を惜しみましょう。大竜王の罰を受けるでしょうが、我が身を雨に換えましょう。きっと私の遺骸を見るでしょうが、それが証です。」と言って、その場を去りました。

はたせるかな、篠突く雨が降り出しました。それから 7 日後に、龍の体は三段に裂かれて、頭が栄町の龍閣寺に落ちてきました。上人は堂の下にそれを懇ろに埋葬しました。また、腹は印西市（旧本埜村）の龍福寺に、尾は匝瑳市（旧八日市場市）大寺の龍尾寺に落ちました。このことがあってから、寺の名前を、龍閣寺から龍角寺に、龍福寺は龍腹寺に

改めたそうです。

小笠原ら¹⁰⁾によると、印旛沼の龍伝説は今昔物語集の龍海寺伝説と似ており、法華経信仰の流布のために語り伝えられた伝説であろう、と言っています。また、印旛の民俗に詳しい松裏善亮（佐倉市上勝田 妙勝寺住職、大正 14 年生まれ）は、自費出版「印旛沼周辺の蛇と龍」¹¹⁾のなかで、奈良県の北ノ庄町にある「大和の伝説」という本の中に、「印旛沼の龍伝説とほとんど同じ内容で、龍の屍体を三か所に葬り、龍頭寺、龍腹寺、龍尾寺と名を付けた」と書いてある、と述べています。

印旛沼の龍が、天空で三つに裂かれて落とされたという龍角寺、龍腹寺、龍尾寺のうち、龍角寺と龍腹寺は印旛沼の近くにあるのに、なぜか、龍尾寺だけは遠い匝瑳市（旧八日市場市）にあります（図 3-3）。龍尾寺を尋ねて、龍尾寺略縁起（昭和 59 年 弘法大師入定 1500 年記念で書かれたもの）を見せてもらったところ、こう書いてありました。

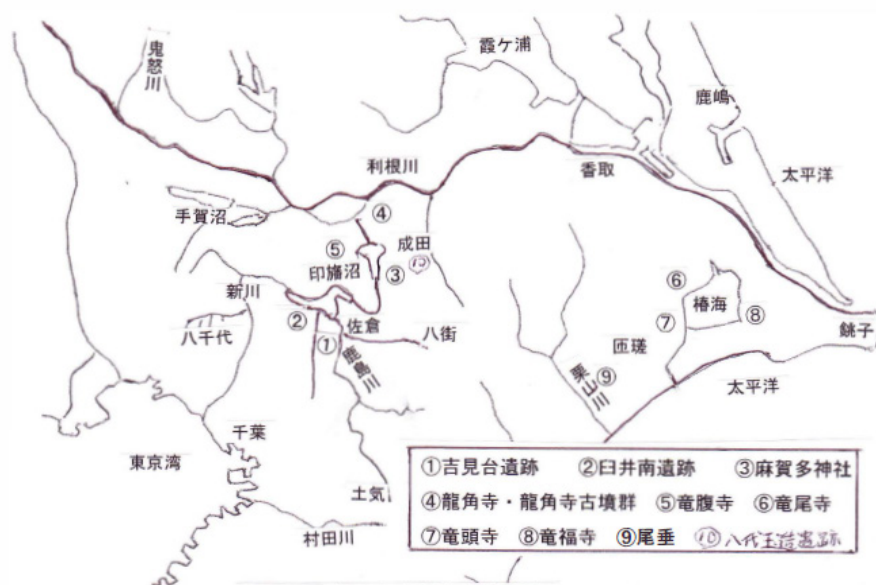


図 3-3 古代文化遺跡の位置図

「和銅 2 (709) 年に釈命上人を導師として雨乞いをしたときに、惣領村の浜より龍神が空に舞い昇り、龍の尾が垂れた。その場所を尾垂惣領村というようになり、後に尾垂村となった。現在の匝瑳郡光町（現横芝光町）尾垂がそれである。空に舞い上がった龍神の軀は三つに切断されて落下し、同時に激しい雨が降り始めた。龍の頭は埴生庄（現成田市・栄町あたり）に、腹は印西庄（現印西市）に、尾はここ北条庄（現匝瑳市）大寺に落ち、その地に埋祀られた。これを関東の三龍寺という」、と書いてあり、印旛沼の龍とは書いてありません。しかも、龍尾寺に近い通称干潟八万石（椿海）といわれる広大な水田地帯の周辺に龍頭寺（匝瑳市木積）、龍福寺（旭市岩井）があります（図 3-3）。龍頭寺でも、尾垂伝説が伝えられています。干潟八万石の耕地は、江戸時代に椿海という内湾を干拓した水田地帯です。

印旛沼と海匝の椿海付近には、このように似た龍伝説があり、どこか繋がりがあいな感じがしてなりません。松裏もこれと似た想像をしています。また、前述の通り、小倉も両地域は大和の大豪族物部氏が関係していることを指摘しています。

〔余話 2〕印旛沼古代文化圏の広がり

古墳時代の印旛沼周辺には、「印旛沼古代文化圏」とも言える文化圏が広がっていました。先に述べた四つの神社圏は、印旛沼古代文化圏に入るでしょう。それに、四街道市物井は「物部の里」と呼ばれ、物部氏と関係のあることから、この地も含まれるでしょう。

面白いことに、印旛地方には独特の方言があります。その代表として「デコ」と「ダス」があります。デコとは「沢山」、ダスとは「差しあげる」の意味です。「キノコをデコ採ってきたからダス」というように使われます。この言葉は、印旛地方以外では聞いたことがなく、かなり古い時代からあったようです。

「デコ」「ダス」を使う地域を調べてみると、殆ど旧印旛郡に相当し、東は根木名川流域の成田国際空港あたり、西は八千代市の東半分（旧阿蘇村）、南は四街道市、北は利根川までの範囲です。この範囲は、印旛沼流域を若干東側にずらして根木名川流域を含め、鹿島川上流を除いた範囲に相当します。そして、この言葉は、東京湾流域にはなく、印旛沼流域との分水界ではっきりと区分されています。

また、旧千葉郡に当たる鹿島川上流域は、弥生時代にあったムラの遺跡が姿を消して、古墳時代前期には遺跡の希薄な地域になっています¹³⁾。なお、根木名川流域は古墳時代の埴生庄にあたり、古墳出土品や当時の谷津田の分布状況などから印旛沼東部の古墳群と同じ勢力圏内にあるように推定⁸⁾されます。印旛沼古代文化圏は、この辺りに広がっていたのでしょう。

なお、印旛沼古代文化は、利根川下流から広がってきたと考えられます。その理由として、当時の遺跡は香取鹿島地方に多く、利根川を遡るほど少なくなっていること、航海術に優れた宗像氏のいたこと、竜伝説は海匝地区と繋がっていること、印旛地方で田植え前に行っている民俗行事「人形送り」のときに唄う言葉の中に「鹿島香取大明神戦に勝みさいな……」とあるなど、民俗行事のなかに利根川下流域の影響がみられること、等などがあげられます。

文献

- 1) 羽島謙三(1975)：関東ローム層と関東平野、アーバンクボタNo.11
- 2) (財)印旛郡市文化財センター (2004)：印旛の原始・古代（旧石器時代編）
- 3) (財)印旛郡市文化財センター (2007)：印旛の原始・古代（縄文時代編）
- 4) 堀越正行 (1994)：縄文時代の印旛沼流域、印旛沼—自然と文化—No.1
- 5) 後藤和民、熊野正也 (1984)：日本の古代遺跡 18 千葉北部、保育社
- 6) 熊野正也 (1996)：印旛沼周辺の弥生文化とその環境、印旛沼—自然と文化—No.1
- 7) 小倉博 (1994)：印旛沼周辺の神社と古代氏族、印旛沼—自然と文化—No.1
- 8) 沼澤豊 (1996)：印旛沼周辺の古墳時代、印旛沼—自然と文化—No.3
- 9) 赤松宗旦 (1938)：利根川図志、岩波文庫
- 10) 小笠原長和・川村優 (1971)：千葉の歴史、山川出版
- 11) 松裏善亮氏 (1990)：印旛沼周辺の蛇と龍、自費出版
- 12) さかえ市民みゅーじかるの会 (2011)：優しい龍の物語（栄町龍伝説）
- 13) 長原亘 (2013)：意外に知らない弥生時代の千葉市、千葉市生涯学習センター資料